

第三十六回

俺だよ

池袋界隈も見渡すかぎり焼野原だった。ここでも空襲で死んだ人たちが沢山いたはずだ。これから電車に乗って十五分ほどで着くはずの実家も、焼けて無くなっているか、家族の誰かが死んでいるかもしれないと、不安な気持ちになった。

電車はどこぞどこぞの入口にトマのない車輛があり、幅の広い板が立つ人の胸のあたりと足許に打ち付けてあつて、乗り降りはこの板を潜りしてしていた。

江古田駅を出て次が私の降りる桜台駅だと入口で立っていると、停車しないでそのまま通過してしまった。駅に近い実家は通過する電車の中から、まだ残っているのが見えた。

その頃桜台駅は一時休止状態にしてあつたようだ。あわてて次の練馬駅で降りた。

練馬駅近くには長姉がいて、養鶏の飼料を売る店をやっていた。そこへ寄れば実家の様子も分かるだろうと、先に立寄っていくことにした。

声をかけると姉が出てきて、夏服に地下足袋、大きな袋を背負った私の顔をじっと見ながら、

「ごちばんですか？」

「いぶかし気にたすねた。」

「俺だよ。」

「ごじつに。」

「おじい。」

「とじつたきりじつとごちんを見詰めたままだよ。」

姉の長女が出てきて

「おじいちゃんだよ。」

「とさけんだ。」

姉は

「おじいちゃんはお戦死して、葬式を出したじゃないか？」
「ごじつに。」

長女は自転車で実家へ知らせに走った。

家中大騒ぎになった。

帰った家では母が元気でいて、私の異様な姿を上から下までじろじろ見ながら

「お前は死んだ事になっているのよー一体どこにいたんだい？」

とびびくり声で云うた。

母はまだ半信半疑の様子で、ただポーと私に顔を向けて立ち尽くしているだけだった。

父は田柄町の上野さんへ木を切りに行っていた長女がまた走って知らせに行くよ、父は

上野さんへ慌てて帰って怪我をしないようにといわれ、仕事をほったらかして帰ってきた。

私の顔をじーと見ていた父は

「いざいざ……」

と一言いさまりで、目をパチパチやっていた。

父は区役所から遺族への扶助料が届けられるよ

「金は働けばできるが、息子は帰らねえ。そんなもの貰っても仕方ねえ」

とじきりに云っていたそうだな。

「いざいざ」

は、金ではなく息子本人が帰ってきたのだから、俺は大満足

「いざいざ」

と言葉をばかやいたのではないかと思う。

易者

父は自宅へ私の戦死の公報が届いた時、信じたくない一心から、あちらこちら易者に

私が生きていないか見てもらいに歩いたり、私が酉歳生れで守り本尊が不動明王という

ことから、成田のお不動さんへお参りに行ったりしたそうだな。

ただ、豊島園の裏にいた占師だけが

「まだ生きている」

と云いつい袋くも(土蜘蛛)のよつな密閉された状態の穴かなにかの中で、多少腹はへらし

ているが生きていると、はつきり予言したそつである。

母は母で、毎日陰膳を欠かさずしてくれていたといふ。「いつする」として、私が腹をすかさず、すむといつわけだ。

この話を聞かされたとき、占い師が私の置かれていた状態をよく当てていたのに驚かされた。私は神通力とか超能力とかは信じない方だが、私が助かったのは、もしかすると、親の大きな愛の力』だったのではないかと思つようになつた。

親に連れられこの占い師へお礼に伺つた。その後、よく当たる占い師と評判になつて、特に戦死者の遺族が押し掛けるようになつたといふことだ。

死んだはずの私が帰還した噂を聞いて、地方からも戦死公報を受けている父や、夫や、息子のことを、もしまやと尋ねてくる人が多くなつた。父は、「いついつ害の対応に忙しかつたせいもあるが、私が帰つたシヨクと喜びで、一か月半ほどは仕事の手につかなかつた。

親戚が入れ代わり立ち代わり来ては、座つている私に、足があるかどうか立つて見せろとよく云つて私を苦笑いさせた。人が信じられないのも道理で、本人の私でさえ信じられないでいるのだから。

家に残していた衣類や自転車まで、私のもの一切が弟の物になつていた。物不足のこの頃、弟に返せとも言えず困りはしたが、そんなことは大したことではなかつた。

私は畳の上で大の字に寝そべつて目をつぶつてゐるとき、ふと何ものかに揺り起され飛び起きることがあつた。そんな時、本当に我が家にいるのだらうつかと不審に思つたり、暫くの間、私のからだは宙に浮いてゐるような錯覚を何度も起す事があつた。

終

次回、後日章は八月十七日(火)更新予定